

# アカデミックスキル・ルーブリックの開発

## —初年次教育におけるスキル評価の試み—

葛西 耕市・稲垣 忠

### 1. 研究背景と目的

#### (1) 研究背景

文部科学省が毎年おこなっている「学校基本調査」によると、2011（平成23）年度の大学・短大進学率（現役）は、53.9%であることが明らかになった。18歳人口の半数以上が大学や短期大学に進学している現状では、入学者によって知識・理解レベルの学力やレポートやディスカッションなどの学習技術、学習意欲などにばらつきがあると考えられている（天野, 2006）。

中央教育審議会が2008年12月24日に出した『学士課程教育の構築に向けて（答申）』（以下、答申とする）では、さまざまな大学入学者に対応するために、初年次教育の充実を各大学に求めた。初年次教育とは、「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的に作られた教育プログラム」（川嶋, 2008a）である。文部科学省（2011）によると、2009（平成21）年度において初年次教育を実施している国公立大学は合計617大学であり、その割合は84.4%であった。このことから、日本のほとんどの大学において初年次教育が実施されていることが明らかにされた。同調査では、初年次教育でどのようなことを実施しているかもたずねている。その結果、「レポート・論文の書き方などの文章作法（533大学、86.4%）」、「プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法（488大学、79.1%）」、「図書館の利用・文献検索の方法（442大学、71.6%）」、「情報収集や資料整理の方法（419大学、67.9%）」など大学での学習に必要なアカデミックスキルを重視していることが明らかになった。なお、本論文では、大学での学習に必要なスキルをアカデミックスキルとする。これは、アカデミックスキルが、レポートや論文の書きかた、テキストの読みかた、大学図書館の利用方法など特に大学での学習するために必要なスキルによって構成されているためである。このほかにアカデミックスキル（以下、スキルとする）は、スタディスキルと表記される場合もある。しかし、両者には明確な定義や区別は存在しないと考えられる。

答申ではこのほかに、学士課程においてどのようなことを身につけたのかという「学習成果」の重視を各大学に求めた。そして、4分野13項目からなる「学士力」を参考指針としてしめした。このような学習成果は、どのようなスキルをどのように測定しているのだろうか。それらをまとめたものを表1にしめす。

表1 学習成果に関する調査の比較

	大学生の学習・生活実態調査	全国大学生調査	学生生活実態調査
主体	Benesse教育研究開発センター(調査企画・分析メンバー代表・山田礼子)	東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター	日本私立大学連盟学生委員会
時期	2008年10月上旬	2007年1月～7月	2010年9月上旬～2010年10月下旬(4年に一度実施し、2010年で13回め)
対象者	18歳から24歳の大学1年生～4年生(留学生・社会人経験者を除く)	127大学288学部の学生(全国の大学の学長・学部長に参加を呼びかけ)	日本私立大学連盟に加入している122大学の学生10268人
回答者数	4070名	48233名	7117人(回答率69.3%)
学習成果	一般常識や基本的・専門的知識の習得、情報リテラシー、問題解決能力、外国語活用能力、クリティカルシンキングなどの28項目	専門的な理解や知識、論理的展開、外国語、クリティカルシンキングなどの9項目	外国語能力、情報リテラシー、表現力、他者理解、クリティカルシンキング、リーダーシップなどの8項目
選択肢	「かなり身についた」「身についた」「ある程度身についた」「あまり身につけていない」「全く身につけていない」の5件法	「十分」「ある程度十分」「あまり十分でない」「不十分」の4件法	「そう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の5件法

表1は、大学生を対象とした3つの調査を比較したものである。大学において学生が身につけたスキルを測定する調査では、「十分身につけている」など回答者の主観にもとづく評価手法が一般的であった。したがって、どのようなことができているならば「十分身につけている」といえるのかは、回答者の認識次第であり、適切な評価がなされているとは言い難いと考えられる。客観的な評価基準にもとづいて身につけたスキルを評価することができれば、より正確に学生が身につけたスキルを測定できるのではないだろうか。

## (2) 研究目的

本研究の目的は、初年次教育において初年次生の獲得したスキルを測定できるルーブリックを開発することである。ここでいうルーブリックとは、客観的な評価基準にもとづく評価ツールのことである。なお、ルーブリックがどのようなものであるかは次章で詳しく述べる。

ルーブリックを開発するために、ルーブリックの開発プロセスを定義する必要がある。本研究では、開発段階と検証段階の2段階の開発プロセスを提案する。開発段階では、大学初年次において求められる一般的なスキルを定義したうえで、ルーブリックを運用する対象科目に即したスキルの明確化を図る。検証段階では、開発したルーブリックの妥当性を明らかにする。開発したルーブリックを実際に使用し、初年次生が自己評価できるかどうか、妥当なものであるかどうかを検証する。以上の2段階の開発プロセスを通して、初年次生のスキル・ルーブリックを明らかにする。

## 2. ルーブリックについて

知識や技能などの学んだ力を測定する一つの方法として、筆記試験がある。西岡（2005）によると、筆記試験では、多肢選択法や正誤法などが用いられる。多肢選択式方法などは、暗記した事柄などを正確にアウトプットできるかどうかを調べることができる。つまり、筆記試験では、知識や技能が測定しやすい長所がある。

その一方で、読解力や討論力などの測りづらい力はどうだろうか。読解力や討論力であっても、テキストの読みかたや討論の方法を知識として覚えることは必要である。しかし、その方法を覚えていたとしても、実際にその力が必要となる場面で活用できなければ何も役に立たない。したがって、読解力や討論力などは、筆記試験では測定しづらいという欠点がある。

このようなことから、パフォーマンスにもとづく評価（以下、パフォーマンス評価とする）が登場した（西岡, 2005）。パフォーマンス評価（performance assessment）とは、石井（2008）によると、「人が実際に思考したり実演したりしている様子を直接的に評価する方法」である。松下（2007a）によると、英語の“performance”は多義的な言葉であり、「業績」や「成果」という意味もあれば、「性能」と使われることもあるという。しかし、パフォーマンス評価における“performance”を「業績」や「性能」という意味で用いると、文脈に上手くあてはまらない。したがって、パフォーマンス評価で用いられる“performance”の意味は、「演奏」「演技」「（作品の）できばえ」に近いという。

パフォーマンスを可視化する一つ的手段として、パフォーマンス課題が用いられる。パフォーマンス課題とは、「学習者のパフォーマンスの能力を、完成作品や口頭発表や実技の実演によって評価しようとデザインされた課題」のことである（岸本, 2005）。そして、パフォーマンス課題には2種類あるとされる。1つは、レポートや小論文、詩や小説、ポスター、図表やグラフ、模型、絵画や彫刻などの完成作品である。もう1つは、口頭発表、ロールプレイ、演奏や演技、演劇、実験器具の操作などその場で発表させる課題である。パフォーマンス課題を大学で用いられるものにあてはめて考えると、前者の完成作品にはレポートやレジュメが該当し、後者のその場で発表させるものはディスカッションや口頭発表などがあたる。

ルーブリックは、このようなパフォーマンス評価の際に用いられる。ルーブリックとは、「成功の度合いを示す数値的な尺度（scale）とそれぞれの尺度に見られる認識や行為の特徴を示した記述語から成る評価指標」（石井, 2005）や「パフォーマンスの質を段階的に評価するための評価基準のこと」（松下, 2010）と説明されている。表2に、ルーブリックがどのようなものかをしめす。

表2 ルーブリックの見本

	評価基準			
	S	A	B	C
評価規準(1)	(1)-S	(1)-A	(1)-B	(1)-C
評価規準(2)	(2)-S	(2)-A	(2)-B	(2)-C
評価規準(3)	(3)-S	(3)-A	(3)-B	(3)-C

表2にあるとおり、ルーブリックは、評価規準と評価基準によって構成されている。安彦(2006)によると、評価規準とは「学習到達すべき目標水準」であり、評価基準は「学習到達の度合いを示す段階づけ」である。表2にあてはめてこれらを説明すると、評価規準は評価規準(1)(2)(3)があたり、評価基準はそれぞれの評価規準に対する「S」「A」「B」「C」というレベルである。

アメリカの約1200大学が加盟しているAAC&U (Association of American College and University) からペーパーテストで学生の身につけた成果を測定することに対して疑問があがった(川嶋, 2008b)。そこでAAC&Uは、アメリカの各大学において使用されているルーブリックの評価規準や基準を分析した「VALUE (Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education) ルーブリック」を作成した。吉田(2011)は、AAC&UのVALUEルーブリックが作られた背景やどのような手順で作られたのかをレビューした。海外では、ルーブリックを使用して学生の身につけたスキルを測定することは一般的にされている。ただし、ルーブリックそのものは作成した大学の学生のレベルに合わせたものであるために、そのまま引用することは望ましくないと考えられる。したがって、評価基準の内容そのものではなく、どのような形式で作られているかを参考にする。

野本(2009)は、ルーブリックを使用しパフォーマンスを測定するメリットとして、①学生自身が、どの程度まで努力すればどのような評価がもらえるのか、行動指針が明確になっている、②学生が自らの学習活動を評価できる、③評価の幅が広がり、現実の学習場面に即した評価を行いながらもある程度の客観性を確保する、④異なる人が評価しても同じ結果が得られる、⑤教員による評価と学生による評価が比較検討できることをあげた。

その一方で、パフォーマンス評価は信頼性の確保が課題とされている(松下2010)。ここでいう信頼性とは、西岡(2005)によると、「テストが測定しようとしている技能や達成事項をどの程度正確に測定しているか」というものである。正解が一つのみである選択式などの客観テストは、同じテストを誰が何度おこなっても、また誰がテストの採点をしてしてもその結果は同じになる。しかし、パフォーマンス課題の評価は、ルーブリックを使用したとしても、課題を採点する者によって評価が異なることがある。また、松下(2007)は、パフォーマンス課題の

開発・実施・採点に多くの時間と労力がかかることやルーブリックの作成が難しいことを指摘している。

本研究では、これらの課題に対してつぎのように対応する。まずは、既存のルーブリックを使用せず新たに開発するため作成に時間がかかることである。これを解決する方法として、評価基準については、文献をもとに一般的なスキルリストを作成する。教員は、リストから選択するだけで対象科目に見合った基準を用意できる。評価基準に関しては、文献等をもとに筆者らが作成することにした。

つぎに、信頼性の課題については、開発したルーブリックにもとづく初年次生の自己評価は、妥当であるかどうかを明らかにする必要がある。そこで、ルーブリックにもとづく初年次生の自己評価とレポートやディスカッションといった実際のパフォーマンスに対する教員側の評価との対応関係を比較する。

### 3. 研究方法

#### 3.1 対象

ルーブリックの対象とした初年次教育科目は、東北学院大学教養学部人間科学科（以下、人間科学科とする）の人間科学基礎演習A（以下、基礎演習Aとする）である。この科目は、人間科学科での学びかたを学ぶ科目として1年生前期に必修科目として設定されている。授業は、教員8名が担当し、教員1名あたりの学生数は約15名である。

2011年度のシラバスによれば、基礎演習Aの達成目標は、「読解力」「思考力」の総合的な学力を身につけることであった。ここでいう総合的な学力は、「読む」「書く」「聞く」「話す」という基本的なリテラシーを基盤として、「疑問を持つ」「問題意識を持つ」「調べる」「考える」「まとめる」「組み立てる」といった「探究」的能力をも含む複合的な学力と説明されている。本研究では、基礎演習Aにおいて身につけることを目指すスキルのうち、「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」（「聞く」、「話す」の2つで「話す・聞く」とする）、「調べる」という4つの基本的なリテラシーをルーブリックの評価対象とする。その理由として、総合的な学力を獲得するには、その前提となる基礎的・基本的なリテラシーを身につけることまずは必要だと考えられるためである。

#### 3.2 調査方法

本研究に用いる方法を図1にしめす。本研究の目的は、初年次教育科目において初年次生の獲得したスキルを測定できるルーブリックを開発することであった。この目的を達成するために、ルーブリックの開発段階と検証段階の2つの段階を設けた。

ルーブリックの開発段階では、初年次生に求められる一般的なスキルを明らかにするためにテキストの内容分析をおこなった。そして、ルーブリックの対象とした基礎演習Aにおいて求められるスキルを明らかにするために、教員を対象とした調査を実施した。検証段階では、開発したルーブリックにもとづいて初年次生は自己評価できるかどうかを明らかにするために、初年次生を対象とした調査を実施した。さらに、ルーブリックにもとづく初年次生の自己評価が妥当であるかどうかを検証するために、教員を対象とした調査を実施した。

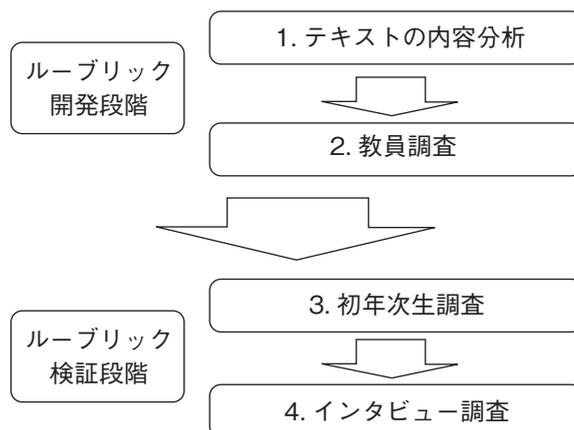


図1 ルーブリックの開発プロセス

### (1) テキストの内容分析

「話す・聞く」リテラシー、「書く」リテラシー、「調べる」リテラシー、「読む」リテラシーにおいて、初年次生に求められる一般的なスキルを明らかにする。本研究では、4つのリテラシーをすべて扱っている初年次生向けテキスト12冊を分析の対象とした。そのテキストを一覧として表3にしめす。テキストの目次より表3のテキストを使用し、テキストの内容分析をおこなった。分析方法は、以下のとおりであった。まず、テキストの目次をもとにして、それぞれのリテラシーにおいて、初年次生はどのようなことを学習するのかという学習内容を明らかにした。つぎに、学習内容ではどのような指導がされるのかという指導項目を明らかにした。この指導項目をもとに、初年次生に求められる一般的なスキルを明らかにした。なお、表3のうち、1-11の番号が割りあてられたものは市販のテキストであり、12は東北学院大学就職部が発行しているものである。1-12という数字は便宜上つけている。

表3 テキスト一覧

1 佐藤望編『アカデミックスキルズ 大学生のための知的技法入門』慶応義塾大学出版会,2006
2 石田春秋『レポート・論文・プレゼンスキルズ』くろしお出版,2003
3 朝尾幸次郎ほか『広げる知の世界 大学でのまなびのレッスン』ひつじ書房,2005
4 学習技術研究会編著『知へのステップ 改訂版 大学生からのスタディ・スキルズ』くろしお出版,2006
5 中澤務・森貴史・本村康哲編『知のナビゲーター』くろしお出版,2007
6 天野明弘・太田勲・野津隆志編『スタディ・スキル入門 大学でしっかりとまなぶために』有斐閣ブックス,2008
7 佐藤智明・矢島彰・安保克也『新編 大学学びのこと始め』ナカニシヤ出版,2011
8 世界思想社編集部編『大学生 学びのハンドブック』世界思想社,2008
9 藤田哲也編著『大学基礎講座 改増版—充実した大学生活をおくるために—』北大路書房,2006
10 専修大学出版企画委員会編『知のツールボックス 新入生援助集』専修大学出版局,2009
11 田中共子編『やわらかアカデミズム・くわかる』シリーズ よくわかる学びの技法』ミネルヴァ書房,2003
12 東北学院大学就職部『キャリアサポート・ブック2010』2010

## (2) 教員調査

この調査は、ルーブリックの対象とする基礎演習Aにおいて必要なスキルを明らかにするために実施した。対象者は、人間科学科の教員23名（2010年12月当時）であった。この23名に対して、テキストの内容分析によって明らかになった初年次生一般に求められるスキルのなかで、基礎演習Aにおいて指導が必要なスキルの調査を質問紙調査によって明らかにした。質問紙（資料1）は、テキストの内容分析によって得られた項目について人間科学科の初年次生に対して指導する重要性や4つのリテラシーをどのような順番で指導するのがよいかをたずねた。

## (3) 初年次生調査

初年次生の獲得したスキルを測定できるかどうかを検証するために、開発したルーブリックを使用した調査をおこなった。対象者は、2011年度に教養学部人間科学科に入学した1年生111名であった。この調査では、基礎演習Aの時間を使用し、2011年5月（以下、5月調査とする）と2011年8月（以下、8月調査とする）の2回、開発したルーブリックを使用した調査を実施した（資料2および3）。

## (4) 自己評価の妥当性の調査

ルーブリックにもとづく初年次生の自己評価が妥当であるかどうかを検証の検証をおこなった。その方法として、教員を対象としたインタビュー調査を実施した。対象は、2011年度の基礎演習Aを担当した教員8名のうち、2名に調査を依頼し実施した。学生は、11名を抽出した。調査ではクラスの印象、4つのカテゴリーからみた学生の印象、レポートやディスカッションなどの様子をたずねた。

## 4.調査結果

### (1) テキストの内容分析

対象とした12冊のテキストの目次より、それぞれのリテラシーにおいてどのような学習内容があるかを明らかにした。つぎに、各ページの記述内容に着目し、学習内容にはどのような指導項目があるかを抽出した。これらを整理することを通して、初年次生に求められる一般的なスキルを明らかにした。

表4に、それぞれのリテラシーの結果を示す。まず、「話す・聞く」リテラシーの学習内容は、ディスカッションとプレゼンテーションによって構成されていたことが明らかになった。さらに、ディスカッションの学習内容は、発表者の意見を聞く「聞き手」、ディスカッションの進めかたにあたる「進行」、質問の3つに分かれた。これらの学習内容における指導項目の結果より、以下の評価規準案を作成した。

表4 「話す・聞く」リテラシー

学習内容	指導項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計(冊)
ディスカッション(聞き手)	意見や話の聞きかたについて					○	○		○	○		○	○	6
	メモの取りかたについて								○			○		2
ディスカッション(進行)	議論のしかたについて					○	○				○	○	○	5
	司会者の役割について					○	○					○		3
ディスカッション(質問)	質問への回答について	○							○					2
プレゼンテーション	発表時間について					○	○		○	○				4
	発表のしかたについて	○	○	○	○		○	○	○	○				8

- D1「漠然と聞くのではなく、メモをとったり質問を考えたりしながら聴く。発表が終わったら、コメント・感想、疑問点を言う。」
- そして、発表する側に必要なスキルとして以下の3つを設定した。
- D2「どのような質問が出るか想定しておく。出された質問には、沈黙せず、簡潔に回答する」
- D3「聞き手は一度しか聞くことができないため、短く簡潔な文でわかりやすい語彙と表現を用いて発表する。」
- D4「ゆっくりと話したりどこを話しているかを示したりするなど、聞く側が聞きやすい話し方で発表する」
- D5「単に文献を紹介するだけではなく、議論の種となるようなポイントを取り上げて発表する。」
- D6「積極的に意見（感想、疑問点など）を話す。ただし、一方的に話すのではなく、相手の意見もきちんと聞く。」
- D7「意見を話すときは、自分の体験、本で読んだことや授業で聞いたことなどを用いながら話す。」

つぎに、書くリテラシーの結果である。「書く」リテラシーの学習内容は、表5より「論文・レポート内容」、「論文・レポート構成」、「用語使用」、「引用方法」、「レジюме作成」の5つであった。そして指導項目は、「論文・レポート内容」は、テーマの設定方法や事実と意見の違いについて、「論文・レポートの構成」は、序論・本論・結論という論文の基本的な構成であった。「用語使用」は文体の統一や推敲であり、「引用方法」は、引用の仕方や引用文献の書き方などであった。「レジюме作成」は、必要な情報や見やすさであった。この結果より、以下の評価規準案を作成した。

表5 「書く」リテラシー

学習内容	指導項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計(冊)
論文・レポート内容	テーマ設定や問題の絞り込みについて		○	○	○			○			○			5
	事実と意見について	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12
	1文の文字数について			○	○		○	○	○	○		○	○	8
	説得力のある主張や書きかたについて	○	○		○	○	○		○	○	○			8
論文・レポート構成	レポートの構成について		○		○	○		○	○		○	○	○	8
用語使用	文体について	○	○		○	○	○		○		○	○	○	9
	推敲について				○	○		○			○	○	○	6
引用方法	引用の仕方について	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12
	参考文献の表記について	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	11
レジюме作成	必要な情報について(授業名・発表日・発表者名・タイトル等)	○					○	○	○	○				4

- W1「自分の意見（主張）に対して、その理由（根拠）を書く。その説得力を持たせるために、データ・先行研究、引用を使う」
- 引用を統合
- W2「読み手に伝わりやすくするために、1行の長さに気をつけて書く」
- W3「他人の意見を引用するときは、どこからどこまでが引用であるかがわかるように書く」
- W4「序論・本論・結論など論文の構成に注意して書く」
- W5「レポートで自分がどのようなことを伝えようとしているのか、方向性を定めてから書く」
- W6「文体（である調、書き言葉、誤字・脱字）を統一して書く」
- レポートを書く際に気をつけることを統合した。
- W7「話の内容がかわるところで段落をかえて書く」
- W8「レポートを執筆するにあたって、参考にした文献の情報を書く。インターネットは、閲覧日とURLを明記する」
- W9「レジюмеは、発表内容のすべてを書きこむのではなく、発表内容全体を把握できるように、簡潔に書く。」
- W10「話すこととレジюмеの内容が前後しないように、発表する通りに内容を並べる」

さらに、「調べる」リテラシーの結果である。「調べる」リテラシーの学習内容は、「情報リテラシー」と「大学図書館の利用方法」の2つであった（表6）。そして、指導項目は、「情報リテラシー」では、情報の信頼性や質について、著作権についてなどであり、「大学図書館の利用方法」は、図書の閲覧方法や本の借りかた、図書の検索方法などであった。この結果より、以下の評価規準案を作成した。

表6 「調べる」リテラシー

学習内容	指導項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計(冊)
情報リテラシー	情報の信頼性や質について	○		○	○	○			○		○	○	○	8
	文献リストの作成について	○	○	○	○		○							6
大学図書館の利用方法	図書の閲覧・貸し出し方法について				○	○			○					3
	各種サービス(レファレンス・複写・相互貸借)について				○				○				○	2
	複写サービスについて				○				○					2
	OPACについて	○		○	○	○	○		○	○	○			8

- I1 「どんなことを調べるのかを絞り込んだうえで、本、新聞、論文誌、インターネットを使い分けて情報収集を行う。」
- I2 「インターネットの情報は、いつ作られたか、誰が発信しているかなど、信頼性や内容に偏りはないかなどに留意する。」
- I3 「分からない用語は、インターネットだけではなく、専門書や入門書、事典などでも調べる。」
- I4 「大学図書館での図書の閲覧・貸出の方法を知る。」
- I5 「文献検索方法（OPAC、レファレンスサービス）を知る。」
- I6 「文献複写・大学間の相互貸借サービスを知る。」

さいごに、「読む」リテラシーの結果である。「読む」リテラシーの学習内容は、テキストの読みかたである「読解」とまとめかたである「要約」の2つによって構成されていた（表7）。そして指導項目は、「読解」は、クリティカルリーディングやキーワードの見つけかたなどがあり、「要約」には、テキストの内容をどのようにまとめるのかその方法が記述されていた。これらの結果より、以下の評価規準案を作成した。

表7 「読む」リテラシー

学習内容	指導項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計(冊)
読解	テキストの読みかた(精読・速読・クリティカルリーディング)について	○		○	○	○			○	○				6
	疑問点や分からない用語、専門用語について	○			○	○						○	○	5
	キーワードやキーセンテンスの見つけかたについて	○		○	○		○		○	○		○		7
要約	まとめかたについて	○			○	○	○	○		○				6
	段落間のつながりについて		○		○		○		○	○		○		6

- R1 「テキスト全体に目を通し、どんなことが書かれているか、分からない用語をチェックしながら読む」

- R2「書かれている内容をそのまま鵜呑みにせず、疑問を持ちながら読む」
- R3「キーワードやキーセンテンスを見つけたりしながら読む」
- R4「接続詞（対立、理由・原因、転換、出発点、並列・付加、結論）に注意し、段落間のつながりを考えながら読む」
- R5「著者の最も伝えたいこと（主張とそれを裏付ける根拠）を意識して読む」

(2) 教員調査

教員を対象とした調査では、先のテキストの内容分析で得られた28項目について2つの方法で初年次生に指導する重要性をたずねた。まずは、テキストの内容分析で得られた28項目について、初年次生にどの程度指導することが重要であるかをたずねた。その設問に対して得点を与えて得点を与えた。得点は、「非常に必要である」に2点、「必要である」に1点、「ある程度必要である」に-1点、「必要でない」に-2点であった。つぎに、それぞれのリテラシーにおいて、最も指導が必要であるスキルをたずねた。この設問には、回答が得られたものについて1点を与えた。これら2つの設問の合計得点が高いものをループリックの評価規準として採用した。

以下に、それぞれのリテラシーの結果をしめす。まずは、図2に「話す・聞く」リテラシーの結果をしめす。D1「漠然と聞くのではなく、メモをとったり質問を考えたりしながら聴く。発表が終わったら、コメント・感想、疑問点を言う。」が28点（問2：23点、問3：5点）、D3「聞き手は一度しか聞くことができないため、短く簡潔な文でわかりやすい語彙と表現を用いて発表する。」は14点（問2：11点、問3：3点）、D6「積極的に意見（感想・疑問点など）を話す。ただし、一方的に話すのではなく、相手の意見もきちんと聞く。」は26点（問2：22点、問3：4点）の3つを「話す・聞く」の評価規準とした。このような結果より、「話す・聞く」リテラシーの評価規準は以下のとおりとした。

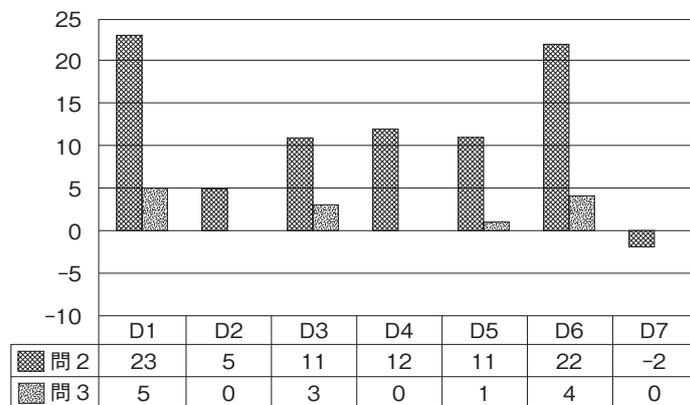


図2 「話す・聞く」リテラシーの結果（点）

- 「A.授業で意見が話せる」(D6)
- 「B.発表を聴き、その内容について質問できる。」(D1)
- 「C.授業で、聴きやすい発表ができる。」(D3)

つぎに、図3に「書く」リテラシーの得点をしめす。「書く」リテラシーは、W1、W3、W5、W6、W8は問2の得点がすべて15点以上であった。そして、問3はW1に回答が集中した。合計得点が高いものは、順番に、W1「自分の意見（主張）に対して、その理由（根拠）を書く。その説得力を持たせるために、データ・先行研究、引用を使う」の27点（問2：20点、問3：7点）、W3「他人の意見を引用するときは、どこからどこまでが引用であるかがわかるように書く」が24点（問2：23点、問3：1点）、W5「レポートで自分がどのようなことを伝えようとしているのか、方向性を定めてから書く」20点（問2：18点、問3：2点）であった。そのため、上記の3つを評価規準として採用した。

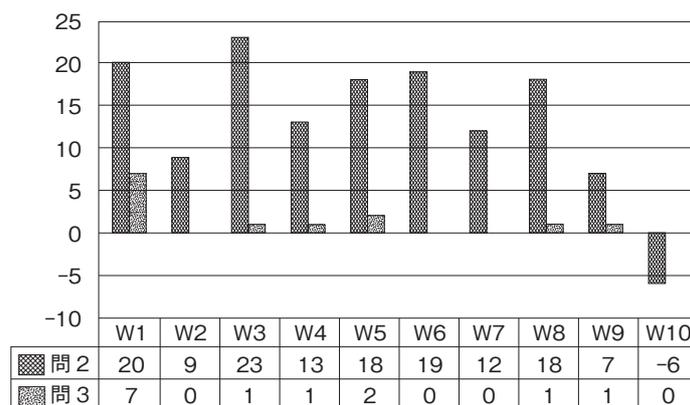


図3 「書く」リテラシーの結果（点）

- 「D.説得力のある文章が書ける。」(W1)
- 「E.他人の文章を引用しながら文章が書ける」(W3)
- 「F.結論から序論まで一貫した内容で文章が書ける」(W5)

さらに、「調べる」リテラシーの調査結果を、図4にしめす。「調べる」リテラシーは、問2ではI3とI4の得点が高く、問3はI6以外の5つに得点が分散した。このような得点結果より、I3「分からない用語は、インターネットだけではなく、専門書や入門書、事典などでも調べる。」26点（問2：23点、問3：3点）、I4「大学図書館での図書の閲覧・貸出の方法を知る。」24点

(問2:22点、問3:2点)を採用した。ほかに高いものとして、I5「文献検索方法(OPAC、レファレンスサービス)を知る。」17点(問2:15点、問3:2点)の3つを規準として採用した。

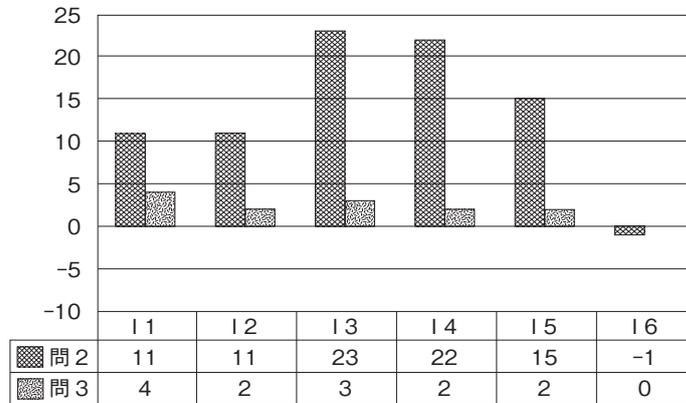


図4 「調べる」リテラシーの結果(点)

- 「G.自分に必要な情報を入手できる。」(I4)
- 「H.自分に必要な文献を図書館で見つけられる。」(I3)
- 「I.インターネットの情報を批判的にとらえられる。」(I3)

さいごに、「読む」リテラシーの得点を図5に示す。「読む」リテラシーは、問2と問3ともにR4以外に回答が集中したことが明らかになった。合計得点を求めた結果、R1「テキスト全体に目を通し、どんなことが書かれているか、分からない用語をチェックしながら読む」が27点(問2:24点、問3:3点)、R2「書かれている内容をそのまま鵜呑みにせず、疑問を持ちながら読む」は28点(問2:23点、問3:5点)、R5「著者の最も伝えたいこと(主張とそれを裏付ける根拠)を意識して読む」は25点(問2:22点、問3:3点)であり、この3項目を評価規準とした。

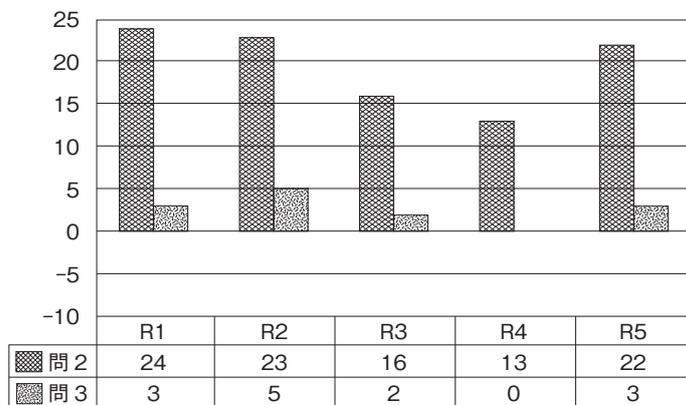


図5 「読む」リテラシーの結果(点)

- 「J.テキストの分からない用語を調べられる。」(R1)
- 「K.事実と著者の意見との区別ができる。」(R2)
- 「L.著者の主張を理解し、他人に説明できる。」(R5)

教員調査の結果より、4つのリテラシーから3項目ずつ合計12項目をルーブリックの評価規準として採用した(資料1)。

つぎに、評価基準の設定である。2章においてAAC&UのVALUEルーブリックをとりあげた。その結果、アメリカの事例では、4段階で測定している傾向がみられた。その4段階の名称はさまざまあるが、最も高いレベルは「想定されるなかでもっともよいもの」、2番めに高いレベルは「学習者に求められる標準的なもの」、2番めに低いレベルは「やや努力が必要なもの」、最も低いレベルは「想定される中で最も努力が必要なもの」であった。したがって、評価基準は、「期待する以上である」、「十分満足できる」、「やや努力を要する」、「相当努力を要する」とした。このほかに、初年次生がスキルをどの程度身についたのかを判断できないことも考えられるため「わからない」というレベルも加えた。5段階で測定をおこなった。このうち、「十分満足できる」を初年次生に求めるレベルとして設定した。評価規準12項目と評価基準5段階によって構成するルーブリックを開発した(資料2)。

### (3) 初年次生調査

開発したルーブリックを使用し、初年次生に実際に自己評価を依頼した。その結果、全員が記入することができ、使用上の問題は特に見られないことを確認した。

そこで、以降はルーブリックへの記入内容の傾向を取り上げる。初年次生がルーブリックにもとづいてどのように評価したのかを明らかにするために、まずは、自己評価の単純集計をおこなった。集計するにあたっては、ルーブリックの評価基準に得点を与えた。得点は、「期待する以上である」に4点、「十分満足できる」に3点、「やや努力を要する」に2点、「相当の努力を要する」に1点、「わからない」に0点である。図6に合計得点を求めた結果をしめす。5月調査と8月調査を比較すると、8月調査では12項目すべての自己評価が上昇したことがしめされた。ただし、「I.情報批判」は、5月調査と8月調査を比較しても変化は見られなかった。

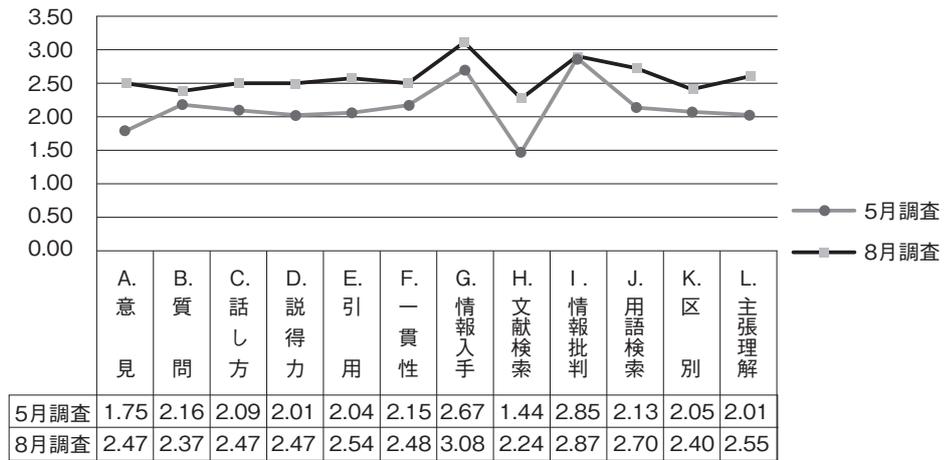


図6 自己評価の単純集計

つぎに、初年次生の自己評価の傾向を分類するためにクラスター分析をおこなった。その結果を、図7にしめす。5月調査のルーブリックにもとづく初年次生の自己評価をもとに分類した結果、全体的に自己評価が低い「自己評価低群」、全体的に自己評価が高い「自己評価高群」、検索や読解のスキルの自己評価が低い「読解・検索苦手群」、文章を書くスキルの自己評価が低い「文章表現苦手群」の4つに分類された。

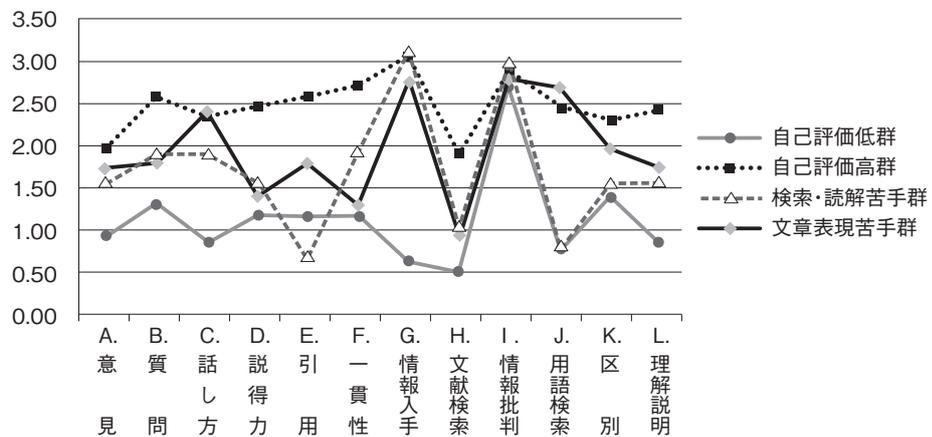


図7 クラスター分析の結果（5月調査）

それぞれのクラスターは8月調査では、どのように変化したのだろうか。その結果を図8にしめす。8月調査では、4つのクラスターがすべて同じような傾向をしめした。つまり、それぞれのクラスターにおいて、自己評価が低かったスキルは5月調査と比較すると上昇したことが明らかになった。

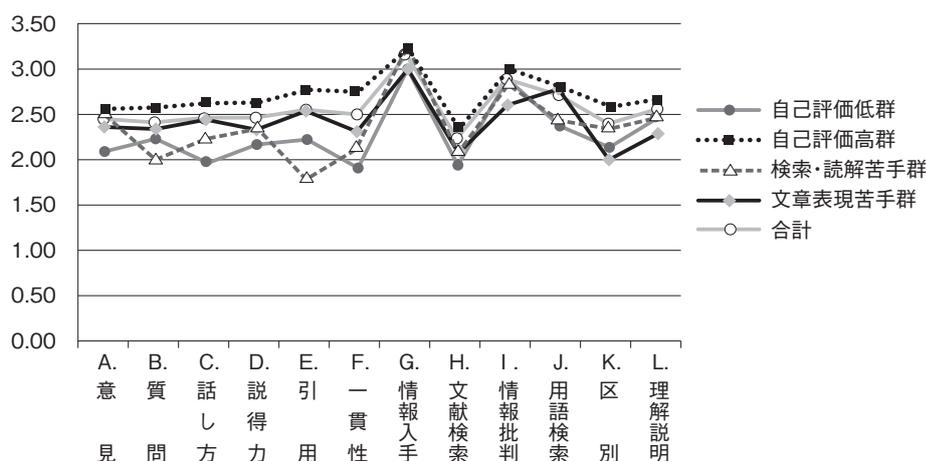


図8 クラスター分析の結果（8月調査）

さいごに、クラスター分析にもとづく5月調査と8月調査の結果には、統計的な有意差がみられるかどうかを明らかにするために、t検定（両側検定）を実施した。その結果を、表8にしめす。

表8 自己評価の統計的有意差の検討

	自己評価低群	自己評価高群	検索・読解苦手群	文章表現苦手群
A.意見見	***	****	**	**
B.質問問	***	n.s.	n.s.	**
C.話し方	***	***	n.s.	n.s.
D.説得力	***	*	***	***
E.引用用	***	*	**	***
F.一貫性性	*	n.s.	n.s.	****
G.情報入手手	****	n.s.	n.s.	n.s.
H.文献検索索	****	****	**	***
I.情報批判判	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
J.用語検索索	***	***	**	n.s.
K.区別別	*	***	*	****
L.理解説明明	***	***	*	***

\*\*\*\*p<0.001,\*\*\*p<0.01,\*\*p<0.05,\*p<0.1

表8によると、「自己評価低群」は、「I.情報批判」を除く11項目において統計的な有意差がみられた。そして、「読解・検索苦手群」と「文章表現苦手群」は、自己評価が低かったスキルに統計的な有意差がみられた。また、「自己評価高群」ではさらに自己評価が上昇したスキルがあることが明らかになった。項目別にみると、「I.情報批判」はすべてのクラスターにおいて統計的な有意差がみられなかった。これは、いずれのクラスターも5月調査の時点の自己評価が高く、8月調査においても大幅に上昇していないためであると考えられる。

#### (4) 自己評価の妥当性の調査

ルーブリックにもとづく初年次生の自己評価はレポートやディスカッションといった実際のパフォーマンスと比較しても妥当かどうかを明らかにするために、教員に対するインタビュー調査をおこなった。クラスター分析の結果にもとづいた11名の学生を抽出した。原則として、それぞれのクラスターから2名ずつとした。ただし、クラスターによっては1名の場合もあったために11名となった。なお、本稿では、紙面の関係上2名の学生を取りあげる。

まずは、図9にS1（検索・読解苦手群）の結果をしめす。5月調査では、「期待している以上」と自己評価した項目はなかった。この学生の特徴は、「わからない」と回答したスキルが「B.質問」、「C.話し方」、「G.情報入手」、「H.文献検索」、「J.用語検索」の5項目あることであった。8月調査では、「F.一貫性」、「I.情報批判」、「K.区別」の自己評価は低下したが、そのほかの9項目は上昇した。以下は、教員からみたS1の印象である。

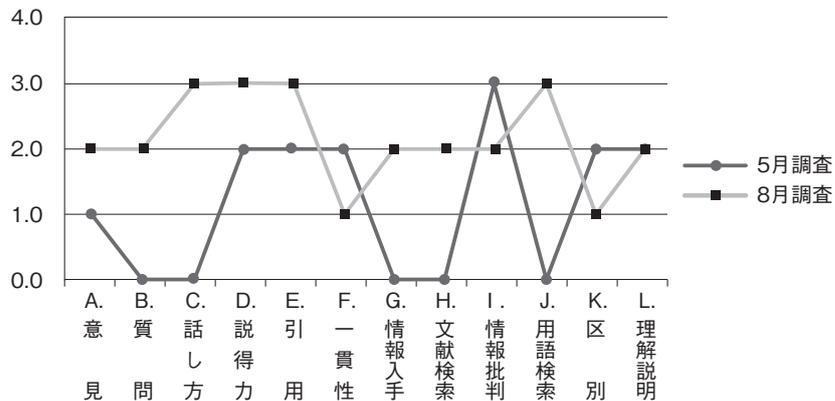


図9 S1の自己評価

##### ● 自己評価について

「F.一貫性」は、自己評価が低下し「相当の努力を要する」となった。実際に、問題と結論が整合していないところがあるため、妥当な評価である。また、8月調査では、3つの「集める」スキルは、「やや努力を要する」という評価だが、これは間違いではない。

そして、「C.話し方」は「十分満足できる」という評価であった。しかし、物静かな学生であるため、妥当な評価であるかどうかの判断が難しい。

この学生は、自己を客観的にとらえることができるため、全体としておおむね妥当な評価である。また、やってみないと自分がどの段階にあるかわからないというのは当然である。このことから考えても、冷静な判断ができる学生だと思う。

S1のルーブリックにもとづく自己評価は、レポートの内容やディスカッションの様子など実際のパフォーマンスと比較してもおおむね妥当であることが検証された。

つぎに、図10にS2（自己評価高群）の結果をしめす。5月調査は、「十分満足できる」は8項目、このほかの4項目は「やや努力を要する」であった。8月調査では、「やや努力を要する」と自己評価した項目はなくなり、12項目すべてが「十分満足できる」以上の自己評価となったため、全体的に上昇したことがしめされた。以下は、教員からみたS2の印象である。

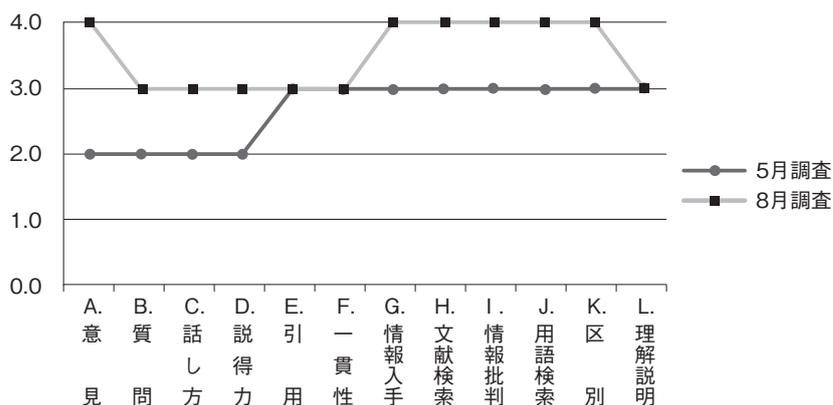


図10 S2の自己評価

● 自己評価について

5月調査と8月調査を比較すると、「やや努力を要する」という評価がなくなり、「期待している以上」が増えるなど評価は全体的に上がった。5月の評価も、本人の実力に照らし合わせれば、もっと高かったのではないだろうか。

8月調査では、例えば一貫性は「十分満足できる」と評価している。しかし、「期待している以上である」であっても特に問題ない。この他の項目についても、もっと高くてもいいのではないだろうか。

本人がそのように評価していたのなら、それはそれで問題ないのではないか。

項目ごとにルーブリックにもとづく初年次生の自己評価の妥当性を検証すると、妥当でない場合もみられた。妥当ではない場合の事例として、初年次生の文章が教員からみて論理的ではないにも関わらず、初年次生自身を書けていると思いついでいる場合や初年次生自身が自身に厳しい性格のためにやや低めに評価することであった。しかし、初年次生の自己評価がレポートの成果やディスカッションの様子と全く合っていない事例はなかった。したがって、ルーブリックにもとづく初年次生の自己評価はおおむね妥当であることが教員を対象としたインタビューを通して検証された。

## 5. 結論と今後の課題および展望

### (1) 結論

本研究の目的は、初年次教育科目において初年次生の獲得したスキルを測定するルーブリックの開発と検証をおこなうことであった。

まずは、開発したルーブリックの結果である。初年次生向けのテキストの内容分析より、「話す・聞く」リテラシーは7項目、「書く」リテラシーが10項目、「調べる」リテラシーは6項目、「読む」リテラシーは5項目であり、4つのリテラシー合わせて28項目となった。つまり、テキストの内容分析によって、「話す・聞く」、「書く」、「調べる」、「読む」という4つのリテラシーにおいて、初年次生に求められる一般的なスキルとして、28項目を抽出した。つぎに、基礎演習Aにおいて必要とされるスキルを明らかにするために人間科学科の教員を対象とした調査を実施した結果、評価規準として12項目を採用した。この12項目と評価基準5段階からなるアカデミックスキル・ルーブリックを開発することができた。

つぎに、開発したルーブリックの検証である。初年次生は獲得したスキルをルーブリックにもとづいて自己評価できることが明らかにされた。さらに、ルーブリックにもとづく初年次生の自己評価は、教員を対象としたインタビュー調査を通じておおむね妥当であることが検証された。したがって、初年次教育科目において初年次生の獲得したスキルについて妥当性をもって測定できるルーブリックの開発という本研究の目的は達成された。

### (2) 今後の展望

今回提案したルーブリックの開発手法では、文献をもとに標準的な規準リストを作成し、その中から科目を担当する教員が必要と考えているものを選ぶものであった。規準リストそのものは、多くの大学で用いられている初年次教育のテキストから抽出したものであるため、他大学の初年次科目に対しても応用できる可能性がある。基準の作成にあたっては、5段階の評定方法を提案した。大学入学時点の学生にとって、適切な自己評価を行うのは容易ではなく「わからない」を加えたことにより、初年次生の自己評価をより正確に把握できたと考えられる。一方で基準の作成は筆者らが独自で作成したものにとどまっており、その妥当性や手法に関しては改善の余地がある。

また、開発したルーブリックの記入結果について、教員による成績評価に反映させることはなかった。今後の運用方法として、例えばルーブリックにもとづく学生の自己評価をもとに、教員と学生が面談などを通じて成績評価に反映させることが考えられる。また、調査対象の学科では、1年次の後期には基礎演習Bが設定されている。ルーブリックにもとづく自己評価が担当の教員に引き継がれれば、どのようなスキルが弱点であるのかがわかるため、個々の学生

指導に活かすということが考えられる。

## 参考文献

天野郁夫『大学改革の社会学』玉川大学出版部,2006.

安彦忠彦「評価基準・評価規準」岩内亮一・本吉修二・明石要一『教育学用語辞典 第四版』学文社,2006,p.207.

中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて（答申）』2008.

石井英真「ルーブリック」田中耕治編『よくわかる教育評価』2005,p.47-48.

石井英真「パフォーマンスの評価」情報教育事典編集委員会編『情報教育事典』丸善,2008,p.78.

川嶋太津夫「『学士力』概念と初年次教育への含意」『初年次教育学会誌』2008a,pp.26-32.

川嶋太津夫「ラーニング・アウトカムズを重視した大学教育改革の国際的動向と我が国への示唆」『名古屋高等教育研究』2008b,pp.173-191.

松下佳代「パフォーマンス評価による学びの可視化」秋田喜代美・藤江康彦編『はじめての質的研究 教育・学習編』東京書籍,2007a.

松下佳代「学びの評価」佐伯胖監修・渡辺信一編『「学び」の認知科学事典』大修館書店,2010,p.450.

松下佳代「学びの評価」佐伯胖監修・渡辺信一編『「学び」の認知科学事典』大修館書店,2010,p.450.

西岡加名恵「学力評価の方法の分類」田中耕治編『よくわかる教育評価』ミネルヴァ書房,2005,p.76.

野本ひさ「成績評価法入門」SPODフォーラム2009資料[http://www.spod.ehime-u.ac.jp/contents/\\_contents2\\_5.pdf](http://www.spod.ehime-u.ac.jp/contents/_contents2_5.pdf)（2011年10月17日アクセス）

文部科学省『大学における教育内容等の改革状況について（平成21年度）』2011,p.14.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/\\_icsFiles/afieldfile/2011/08/25/1310269\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2011/08/25/1310269_1.pdf)（2011年9月20日アクセス）

文部科学省『平成23年度学校基本調査（確定値）』2012.  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2012/02/06/1315583\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2012/02/06/1315583_1.pdf)（2012年2月27日アクセス）

吉田武大「アメリカにおけるバリュールーブリックの動向」関西国際大学『教育総合研究叢書』2011,pp.1-12.

資料1 教員調査票

2010年12月22日

## 調査ご協力のお願い

東北学院大学大学院人間情報学研究科  
博士前期課程1年 葛西耕市  
指導教員 稲垣忠、片瀬一男、水谷修

この調査は、修士論文の一環として行うものです。調査の目的は、人間科学科の教員は、初年次生に対して、どのような学習スキルを指導することが必要と考えているかを明らかにすることです。調査を実施するにあたり、初年次生向けに出版しているテキストの内容について、どのようなことが書かれているかという分析を行いました。それをもとに、人間科学基礎演習において育成を目指している「読む」「書く」「聞く」「話す」という基本的リテラシーを中心に集約をしました。

この調査の結果をもとに、評価指標の作成を行います。この評価指標は、人間科学科での学習の方法が、どの程度獲得できているか学生個人が確認できるものを目的としています。そして、来年の前期終了時に、作成した評価指標をもとに、スキルがどの程度を獲得できているかどうか調査を実施する予定です。

ご面倒とは思いますが、ご協力のほどよろしく申し上げます。

### 記入・提出方法について

初年次生に対する指導の重要性という視点で、ご回答していただくようお願いします。また、調査票とは別に書き方の例を配付しますので、そちらを参考にして回答するようお願いいたします。

調査票は、2011年1月8日（土）までに4号館4階稲垣研究室ポストまでにご提出お願いします。なお、調査票をデータとして後日送りますので、そちらで回答し、葛西宛のメール(kkasai@ghi.tohoku-gakuin.ac.jp)に提出いただいても構いません。

初年次生に対して指導が必要な学習スキルの調査

問1 どの領域に所属しているか答えてください。 教育学 社会学 心理学 体育学 人間学  
 問2 以下のスキルは、初年次生に対してどの程度指導する必要があるかと考えていますか。1~4のなかであてはまるものひとつに○を付けてください。  
 問3 人間科学科の初年次生に対して、どのスキルを最も指導する必要があるかと考えていますか。各項目からひとつを選び、○を付けてください。

指導項目	問2		問3	問4
	非常に必要である	必要である		
書く	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
話す・聞く	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
読む	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
調べる	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1
	4	3	2	1

問4 基礎演習における指導として、書く、話す・聞く、読む、情報収集のどの順番で指導することがよいと考えますか。問4の欄に1~4の番号を書いてください。  
 問5 初年次生の指導において、普段感じていること・課題点などありましたら自由に書いてください。

資料2 初年次生調査票 (5月調査)

2011年5月9日

## 大学1年生の学習スキルに関する調査 (第1回目)

東北学院大学大学院人間情報学研究科  
博士前期課程2年 葛西耕市  
指導教員 稲垣忠、片瀬一男、水谷修

### 調査趣旨について

この調査は、私の修士論文の一環として行うものです。目的は、人間科学科の1年生に大学入学時点で学習スキルがどの程度身についているかを明らかにすることです。そして、入学時と授業終了後と比較し、どのように変化しているかを分析の対象とします。

このような目的であるため、みなさんに対して数回調査を行う予定です。ご面倒とは思いますが、ご協力よろしくお願ひします。

### 個人情報保護について

調査の目的を達成するため、あなたの学生番号を記入していただきます。これは、大学入学時と前期授業終了時でどのように変化が見られるかを把握するためです。

あなたの学生番号および回答は、分析のみに使用し、他のことには一切使用しません。また、論文では、個人を特定できるような書き方はしません。そして、回答内容によって、あなたの成績に影響を与えることは絶対にありません。どうぞ安心して回答してください。

### 注意事項 (回答・記入方法) について

1. 調査員の指示があるまで、調査票への記入はしないでください。
2. この調査は、テストではありません。したがって、あなたの考えをありのまま記入してください。(先述したように、成績には一切影響しません)
3. 赤色以外のボールペンまたはシャープペンシルで記入してください。回答を訂正する場合、二重線で訂正するか消しゴムを使ってしっかり消してください。
4. 回答は、設問の指示に従って正しく記入してください。
5. 記入が終わったら、学生番号が記入されているか、設問の指示通り記入されているか、記入漏れはないかなどを十分確認し、提出してください。なお、提出方法は、口頭で指示します。

問1 あなたの学生番号を記入してください。

問2 以下に示すAからIのスキルについて、現時点であなたはどの段階にあると評価しますか。AからIのスキルごとに、あてはまる段階一つずつ○をつけてください。

期待している以上である	十分満足できる	やや努力を要する	相当の努力を要する	わからない
5つ以上いえる。	3つから4ついえる。	1つか2ついえる。	全くいえない。	○

(回答例)

期待している以上である	十分満足できる	やや努力を要する	相当の努力を要する	わからない
A 授業で、意見が話せる。	伝言たいことのポイントを押さえている。	話が短すぎたり長すぎるので、何を言いたいのかが伝わらない。	意見を述べることはまったくかたぼろない。	
B 発表を聴き、その内容について質問できる。	メモを取りながら聴き、話し手の伝えたいことに関連した質問をしている。	メモを取りながら聴いているが、それに集中し、何を質問したいのかわからない。	メモを取らず漫然と聞いているため、質問できない。	
C 授業で、聴きやすい発表ができる。	聴きやすい速さと声の大きさを調整している。さらに、強調をつけている。	聞こえにくい(早口)になったり声の大きさが聞かれないことがある。	話す速さは極端でも遅いまたはとても速いので、声はかきこえずに聞きにくい。	
D 説得力のある文章が書ける	批判的なデータや先行研究、引用を理由に挙げている。	主張と関係ないことを理由としてあげ、説得力に欠ける。	私的な理由が書かれているため、説得力が全くない。	
E 他人の文章を適切に引用しながら文章が書ける	自分の主張に批判的な文も引用している。	自分の主張と比較すると、引用文のほうが多い。	自分の主張がほとんどなく、大部分が引用である。	
F 序論から結論まで一貫した内容で文章が書ける。	序論から結論まで内容が一貫している。	序論と結論で主張が異なっているなど、一貫性がない。	展開の仕方があいまいではっきりしていない。	
G 自分に必要な情報を手でできる	入手した情報について、本当に必要な情報が書かれているかどうか判断している。	専門用語ではなく、普段使用している言葉で検索し、必要情報を手に入れている。	手当たり次第調べたため、必要な情報を入手することができない。	
H 自分に必要な文献を図書館で見つけられる。	蔵書検索と期間記事データベースにアクセスして、必要な文献を取り寄せている。	蔵書検索に加え、新聞記事データベースも使うことができる。	文献を戻すことができない。蔵書検索は利用していない。	
I インターネットの情報を批判的にとらえられる。	本当に正しいかどうか、信頼できる資料を使い判断している。	すべてが正しいと考えるのではなく、信用できるかどうか判断している。	インターネットの情報は、すべて正しいと考えている。	
J テキストの分からない用語を調べられる。	リストアップし、専門辞典を使って調べている。	リストアップし、国語辞典を使って調べている。	分からない用語をリストアップし、wikipediaなどを使って調べている。	
K 事象と著者の主張との区別ができる	著者の主張について、さらに展開できる。	著者の主張を理解し、その主張に照らして、自分なりの意見や感想を言える。	事象と主張の区別がつかない。	
L 著者の主張を理解し、他人に説明できる。	主張の展開の仕方も理解し、それをふまえて説明できる。	主張のほとんどを理解し、要約して説明できる。	事象と主張の区別がつかない。主張が理解できていない。	

問3 高校での学習についてお聞きします。あなたは、高校の先生から指導を受けた(授業で学習した)スキルがありますが、ある場合は、指導を受けたものすべてに○をつけてください。

A 授業で、自分の意見を話すこと。	G 自分に必要な情報を入力すること。
B 他人の発表を聴き、その内容について質問すること。	H 図書館で必要な文献を見つけること。
C 授業で、聴きやすい話し方をすること。	I インターネットの情報を批判的にとらえること。
D 説得力のある文章を書くこと。	J テキストの分からない用語を調べること。
E 他人の文章を適切に引用しながら文章を書くこと。	K 事象と著者の主張との区別をすること。
F 序論から結論まで一貫した内容で文章を書くこと。	L 著者の主張を理解し、他人に説明すること。

問4 最後に、大学での学習に関してお聞きします。あなたは、大学でどのようなスキルを身につけたいと思いますか。問3以外のスキルでも構わないので、自由に書いてください。

資料3 初年次生調査票 (8月調査)

問1 あなたの学生番号を記入してください。

問2 以下に示すからLのスキルについて、現時点であなたはどの段階にあると評価しますか。AからLのスキルごとに、あてはまる段階一つずつ○をつけてください。

期待している以上である	十分満足できる	やや努力を要する	やや努力を要する	相当の努力を要する	わからない
5つ以上いえる。	3つから4ついえる。	1つか2ついえる。	全くいえない。	○	

(回答例)

期待している以上である	十分満足できる	やや努力を要する	やや努力を要する	相当の努力を要する	わからない
A.授業で、意見が話せる。	理由や例を使い、ポイントを明確にして話している。	伝えたいことのポイントを押さえている。	話が短すぎたり長すぎると、何を言いたいのかわからなくなる。	意見を述べることはまったくかまわない。	
B.発表を聴き、その内容について質問できる。	メモを取りながら聴き、話し手の伝えたいことに関連した質問をしている。	メモを取りながら聴いているが、それに関連したことを質問している。	メモを取らず速読と聞いているため、質問できない。		
C.授業で、聴きやすい発表ができる。	聴きやすい速さと声の大きさを話している。さらに、強調をつけている。	聴きやすい速さと声の大きさを話している。	聞こえない(早口)になったり声が小さかったりするところがある。	話す速さは極端(とても遅い)またはとても速い(とても早く)で、声は小さく聴きにくい。	
D.説得力のある文章が書ける。	批判的なデータや先行研究、引用を理由に挙げている。	主張と関係するデータを理由としてあげ、説得力に欠ける。	私的な理由が書かれているため、説得力が全くない。		
E.他人の文章を適切に引用しながら文章が書ける。	自分の主張を適切に引用しながら文章が書ける。	自分の主張を補強するために、適切に引用をしている。	自分の主張がほとんどなく、大部分が引用である。		
F.序論から結論まで一貫した内容で文章が書ける。	序論から結論まで、明確かつ論理的に展開している。	序論から結論まで内容が一貫している。	序論と結論で主張が異なっているなど、一貫性がない。	展開の仕方があいまいではっきりしていない。	
G.自分に必要な情報を手入れできる。	入手した情報について、本当に必要な情報が書かれているかどうか判断している。	専門用語をキーワードとして検索し、必要な情報を入力している。	専門用語ではなく、普段使用している言葉で検索したため、入手まで苦労する。	手当たり次第調べたため、必要な情報を入手することができない。	
H.自分に必要な文献を図書館で見つけられる。	蔵書検索と新聞記事データベースから必要な文献を入手している。	蔵書検索に加え、新聞記事データベースも使うことができる。	蔵書検索を使い、必要な文献を見つめることができる。	文庫検索は利用していない。	
I.インターネットの情報を批判的にとらえられる。	インターネットの情報を批判的にとらえる資料を使い判断している。	すべてが正しいものではないと判断し、信用できると判断している。	すべてが正しいと判断している。	インターネットの情報は、すべて正しいと判断している。	
J.テキストの分らない用語を調べられる。	リストアップし、専門辞典を調べて調べる。	リストアップし、国語辞典を使って調べている。	分らない用語をリストアップし、wikipediaなどを使って調べている。	テキストは読んだが、調べていない。	
K.事実と著者の主張との区別ができる。	著者の主張について、さらに展開できる。	著者の主張を理解し、その主張に対し、自分なりの意見や感想を述べる。	事実と著者の区別がつかない。	事実と主張の区別がつかない。	
L.著者の主張を理解し、他人に説明できる。	主張のほどんどを理解し、要約して説明できる。	主張のほとんどを理解し、要約して説明できる。	内容を理解したが、相手に説明できない。	主張を理解できていない。	

問3 人間科学基礎演習Aを受講し、今後どのようなスキルを身につける必要があると考えましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

A.授業で、自分の意見を話すこと。	G.自分に必要な情報を入力すること。
B.他人の発表を聴き、その内容について質問すること。	H.図書館で必要な文献を見つかること。
C.授業で、聴きやすい話し方をすること。	I.インターネットの情報を批判的にとらえること。
D.説得力のある文章を書くこと。	J.テキストの分らない用語を調べること。
E.他人の文章を適切に引用しながら文章を書くこと。	K.事実と著者の主張との区別をすること。
F.序論から結論まで一貫した内容で文章を書くこと。	L.著者の主張を理解し、他人に説明すること。

問4 最後に、学び方に対するあなたの考えをお聞かせください。あなたは、高校での学び方と大学での学び方とを比較して、最も違うと感じたこととはどのようなことですか。以下の空欄に、自由に書いてください。